

富山県出身の蕨類研究のパイオニア：笹岡久彦 (1889-1945?)

著者	山岡 正尾, 坂井 奈緒子
著者別表示	Yamaoka Masao, Sakai Naoko
雑誌名	植物地理・分類研究
巻	49
号	2
ページ	187-191
発行年	2001-12-28
URL	http://doi.org/10.24517/00055405



山岡正尾¹・坂井奈緒子²：富山県出身の蘚類研究のパイオニア—笹岡久彦 (1889-1945 ?)
Masao Yamaoka¹ and Naoko Sakai²: Hisahiko Sasaoka (1889-1945 ?), a pioneer of Japanese bryology

はじめに

富山県はコケ類—蘚苔・地衣—の調査研究の空白地帯と言われたこともある。しかし蘚苔類について言えば、古くは1910年から1930年代にかけて富山県出身の笹岡久彦が、日本産蘚類の研究に取り組み、新種や新産地を報告し(笹岡 1921 a, 1921 b, 1925 b)、多くの標本を集め、日本の初期の蘚類研究に大きな業績を残し、その発展に寄与した。また地元富山県の蘚類についても意欲的に研究した。その業績については富山県でもあまり注目されることがなく、また、日本の蘚苔類研究の専門家のあいだでは時に笹岡の業績が取り上げられることがあっても、ひろく業績が注目されることもなく、笹岡自身の経歴についてもあまり知られていないのが実態である。

富山県の蘚苔類研究は、笹岡が蘚類 39 科 285 種(笹岡 1938 a, 1938 b, 1938 c)の目録をまとめた他には、ほぼ同時代に吉沢(1925)がその著書「立山」で蘚類 12 種、苔類 2 種を記録している。その後、山岡(1941, 1994)がヒカリゴケおよびホンモンジゴケを記録し、富山県や国内外での分布を調査している。最近では本多(1996)が富山県産の水生苔類 27 種、水生蘚類 28 種を報告し、さらに坂井(2000)が水生蘚苔類 28 種を報告し、あらためて富山県の蘚苔類の研究が注目されつつあるように思われる。

この機会に、従来あまり注目されることのなかった笹岡久彦の業績と、経歴を確認しておくことは、富山県のみならず日本における今後の蘚苔類研究のために意義あることと考える。

筆者の一人山岡は、かつて富山県師範学校専攻科生として進野久五郎(1900-1984)に学び、1940年に立山登山道の八郎坂でヒカリゴケを発見して、報告したことがある(山岡 1941)。その時、すでに笹岡が富山県の蘚類について重大な貢献をしていた事から、その文献(笹岡 1910, 1914, 1916, 1938 a, 1938 b, 1938 c)や吉沢(1925)の記録にヒカリゴケの記載があるか否かを調べる必要があった。精査の結果、ヒカリゴケの発見は富山県の新記録であることが確認された。その際、図らずも、笹岡の偉大な業績に接する機会があったものの、直接面談を得る機会も無く過ぎてしまったのは大変残念なことであった。このことを思いつつ 60 余年が経過してしまった。

なお、本稿内では敬称はすべて割愛した。

1. 笹岡久彦の経歴

「月岡郷土史」(月岡郷土史編集委員会 1991)によれば、久彦は明治 22 年(1889 年)5 月 20 日、富山県上新川郡月岡村(現、富山市月岡町)の生まれで、生家は元禄の頃すでに私塾「樞年堂(けんねんどう)」を開いており、祖父は医師として本草学に精通していたと言われる。「月岡郷土史」に掲載された「笹岡神職家の系譜」によれば、久彦は笹岡家の第 15 世で、本草学の教養から出発した植物学の素養があり、南方熊楠の指導を受けたこともあると言う。学歴については、実業系の中等学校出身と伝えられる(野口 1972)だけで、詳細は不明である。どんな動機で蘚類の研究に入ったのか明らかではないが、20 歳の頃すでに「蘚乃人(せんのひと)」と号していた。明治 43 年(1910 年)には東京に出て、浅草地光院内、さらに小石川大門、翌年には飯田町、しばらくして杉並区天沼に移り、天沼では「東洋蘚類研究所」を称し研究の拠点としていたと思われる(井上 1972 b)。昭和 4 年(1929 年)に天沼の笹岡家を訪ねた野口彰は、天沼における笹岡の生活の状況を良く伝えており、「豪放ともいえるような心情の持ち主で、こけに熱意を傾けて余事を顧みないような生活態度があり、周囲とうまくそりが合わないところがあったのでなかるうか」と記している(野口 1972)。当時の笹岡にはこれといった定職はなかったようであるが、この頃までにすでに 2 回台湾に出向いている。1 回は巡査としての赴任、もう 1 回は台湾の標本商に雇われてであったが、どちらも台湾で蘚類を採集したいばかりに赴いたということである。笹岡の風貌を知る人は今となってはほとんど見当たらないようであるが、笹岡(1929 b)には、台湾で撮影した採集服姿に双眼鏡をさげた颯爽とした写真が見られる。昭和 10 年(1935 年)頃までは郷里の月岡へ帰ることもあったらしく、日枝神社(富山市)の副宮司や神通中学校(現、県立富山中部高校)で教鞭をとったことがあるとも言われている(月岡郷土史編集委員会 1991)。どちらにしても、これという定職もなく、また一方では郷里を離れなければならない特別な事情もあったように推察される。笹岡は、「植物研究雑誌」に発表した「蘚類雑記(一)」(笹岡 1919)では「富山県 樞廼舎(かしのや)」の号を用いていたが、「蘚類雑記(三)」(笹岡 1928 b)では「迷蘚愚士(めいせんぐし)」の号を、「蘚類雑記(四)」(笹岡 1929 a)では「迷蘚愚奴(めいせんぐど)」と号を変えている。樞廼舎の号は祖先から続いた「樞年堂」

に因むものであろうが、「迷藓愚士」や「迷藓愚奴」は、郷里月岡村を離れざるを得なかったことにたいする自虐自嘲の思いが込められているものと思われる。

2. 笹岡の藓類学への貢献

井上(1972 a, 1972 b)によれば、日本における藓類研究の歴史は、1. 本草時代—黎明期, 2. U. Faurieの活躍と功績, 3. 日本人採集家の台頭と活動, 4. 研究者の台頭と活動—成長期の4期に分けられるという。井上(1972 b)は、この第4期成長期の初頭を飾る人物として、岡村周諦(1877-1947)、飯柴永吉(1873-1936)、笹岡久彦の3名を挙げている。つまり、笹岡は日本の藓類を採集するだけでなく、自力で研究活動を進めた日本人最初の研究者の一人として数えられているのである。この時代には、岡村と飯柴以外に、日本産の藓類を研究している学者はなく、その意味では笹岡は日本における藓類研究のパイオニアの一人であったと言っても過言ではない。

笹岡は1910年から1938年までの間に、「植物学雑誌」や「植物研究雑誌」を中心に論文を記載している。筆者らが調べることができた26編(笹岡1910-1938 c)は引用文献の項にあげてある。抜け落ちがあれば、ご一報いただくと誠に幸いである。

当時の日本植物学会の機関誌「植物学雑誌」を開いてみると、岡村の日本産藓類の論文とならんで、笹岡の数編の論文(笹岡1910, 1913, 1914, 1915, 1916)を見ることができる。藓類の研究に関しては富山在住の頃からすでに岡村の指導を受けていたようで、植物学雑誌に掲載された論文には「岡村周諦博士鑑定」と明記されている。東京を研究の拠点としてからは本格的に岡村の指導を受け、さらに岡村の仲介で当時藓類の研究では世界的な権威であったフィンランドのV. F. Brotherus(1849-1929)に採集品の鑑定を依頼した。Brotherusとの交流は1929年の彼の死去まで続き、その後はイギリスのH. N. Dixon(1861-1944)に鑑定を依頼した(井上1972 b)。Brotherusに送った標本には多数の新種が含まれていたということである。これらの鑑定の結果得られた新しい知見は「植物学雑誌」に「最近発表若クハ所命ノ新藓類」(笹岡1921 a)、「藓類植物雑記」(笹岡1921 b, 1924, 1925 b)、「植物研究雑誌」に「藓類雑記」(笹岡1928 a, 1928 b, 1929 a, 1929 b, 1933 a)と題して紹介されている。Brotherusに同定依頼したのものには、笹岡自身が採取したものの他に、笹岡のもとに送られてきた標本も多くあった(野口1934)。このことは笹岡の論文(1921 a, 1921 b, 1924, 1925 b)でも示されている。採取者名には久内清孝、正宗巖敬、南方熊楠、竹内亮、田代善太郎、鳥羽源蔵など当時の一流の植物学者が含まれている。全国各地から多くの標本が笹岡のもとに送られてきたことが推察される。笹岡(1921 a)ではBrotherusによって新種とされた藓類の報告があり、4回にわたる「藓類植物雑記」(笹岡1921 b, 1924, 1925 a, 1925 b)ではBrotherusによって新種とされた藓類の報告や新産地、学名の変更、日本産の属名の新称名、参考書の紹介、飯柴やDixonとの交友があったことがうかがえる記載がある。7回におよぶ「藓類雑記」(笹岡1919, 1928 a, 1928 b, 1929 a, 1929 b, 1931, 1933 a)の記事の中では、相州蛭ヶ岳、武州高尾山、朝鮮金剛山など各地の藓類、樅(モミ)樹幹の藓類の報告、あるいは日本新産の藓類の紹介、属名の和名の新称、学名や和名の変更、参考書の紹介などもある。

新種の中には笹岡への献名がある。笹岡は笹岡(1929 b)で紹介した*Sasaokaea japonica* Broth.の属名が自身への献名であることを大変喜び、和名も「ささおかごけ」としている(笹岡1931)。献名されるにいたったタイプ標本は伊勢神宮の境内で植物調査をしていた植賀安平の採集に依るもので、笹岡はBrotherusに鑑定を依頼しただけであるため、植賀は自分の栄誉を無視されてしまったことに対して無念の気持ちであったようである(安藤1977)。この種はその後、野口彰、さらに神田啓史の研究の結果種小名が変更され、*Sasaokaea aomoriensis* (Par.) Kandaとされている(樋口1999)。和名のササオカゴケは現在も属名に使われ、種名もアオモリカギハイゴケと併用して使われている(環境庁自然保護局野生生物課2000)。Iwatsuki(1991)で見ると、他に現在も使用されている学名で種小名が献名されたものに、*Dicranum sasaokae* Broth. ex Ihs. コクロベシッポゴケ、*Dolichomitriopsis sasaokae* (Dix. et Ther.) Nog. トガリバコクサゴケ、*Mielichhoferia sasaokae* Broth. コシノシンジゴケの3種がある。

小林(1984)によれば、笹岡は昭和10年(1935年)頃、東京文理科大学(現筑波大学)の小林義雄の研究室を訪ね、標本集発行の相談をしたということである。自作の標本集30セットばかりを発行して、とくに志のある人や、学校、研究機関などに購入してもらうことで、生活の資を補うことを意図していたようである。欧米の先進諸国では、植物学研究の成果を発表する手段として研究論文や本を出版するとともに、標本集を発行することが一般的である。最近では、日本でも博物館、大学あるいは植物研究所から標本集を発行する例が見られるようになったが、当時としては画期的な事業であった。標本集発行の動機は兎も角として、笹岡の藓

類標本集は日本における最初の植物標本集であった。

笹岡のコレクションは薬学博士朝比奈泰彦の仲介で、武田薬品㈱の創始者武田長兵衛に代金 5,000 円で引き取られ、その後国立科学博物館へ寄贈された。その標本の総数は 1 万点あるいはそれ以上と言われ、その大分は国立科学博物館植物研究部標本庫 (TNS) に収められ、現在でも内外の研究者によって利用されている。笹岡が Brotherus に送った標本に基づいて、多数の新種が記載されている。そのため、笹岡コレクションのなかには新種として記載されたタイプ標本の重複品、つまり isotype が含まれていることが考えられる。樋口 (1999) によれば笹岡コレクションは 120 点以上のタイプ標本を含んでいるということである。いっぽう、Stafleu (1986) によれば、標本総数は 13,000 点以上で、主に国立科学博物館 (TNS) に収められ、重複標本は大英博物館 (BM)、ハーバード大学フェーロ標本庫 (FH)、ヘルシンキ大学 (H) などにも収められていると言う。このように、笹岡が残した資料は、その後の日本の藓類フロラ解明にとって、重要な役割を演じていることは間違いなく、とくにその標本が完全な状態で国立科学博物館に残されていることは、日本の藓類研究にとって非常に喜ばしいことである。

笹岡は諸外国の藓類学者に標本を送って鑑定を求め、その結果を各種の報文に記録を残しただけでなく、それを土台にして独自の研究を重ね、日本産の藓類の図解、フロラをまとめることを意図したとみられる「日本産藓類名彙」と題する立派な原稿を完成させていた (井上 1972 b)。しかし、この原稿が日の目を見ることがなかったことはまことに残念である。原稿は国立科学博物館に保管されている (井上 1972 b)。

3. 笹岡が記録した藓類目録について

笹岡コレクションの標本数は膨大であるが、多くは地方在住者から笹岡の元に送られてきたもので、笹岡自身の手によって採取した地域は、東京近郊、富山、伊勢、台湾に限られるようである (笹岡 1915; 野口 1972)。笹岡が地域の目録として報告したのは富山 (笹岡 1910, 1914, 1916, 1938 a, 1938 b, 1938 c)、伊勢 (笹岡 1913, 1915)、相州蛭ヶ岳、武州高尾山 (笹岡 1928 a)、朝鮮金剛山 (笹岡 1928 b)、満州 (笹岡 1933 a)、近畿地方 (笹岡 1934 c, 1934 d, 1934 e) で、なかでも近畿地方と郷里の富山の報告は種数が多い。

近畿地方の藓類は、「植物趣味」に「近畿地方藓類目録」として 3 回にわたりまとめられている (笹岡 1934 c, 1934 d, 1934 e)。この目録は、それより以前に報告された「伊勢国産藓類報告」(笹岡 1913, 1915) の 130 種のうちの 115 種、笹岡 (1921 a, 1921 b, 1924, 1925 b) で新種 (Brotherus や Dixon によって新種として発表されたもの) や新産地として記録されているものの中にも含まれる近畿地方産の藓類 28 種、笹岡 (1929 b) での「未発表の新種藓類一束」にある近畿地方産藓類 13 種のうちの 12 種を含み、さらにその後の研究によって発見されたものが追加されて、変種や品種を含めて総数 452 種で当時としては空前の記録となっている。

富山県の藓類については、当時富山県教育会の機関誌であった月刊「富山教育」に「富山県産の藓類」として 3 回にわたってまとめた目録がある (笹岡 1938 a, 1938 b, 1938 c)。この目録は、それよりも以前に「越中国産藓類報告」(笹岡 1910, 1914, 1916) で報告した 123 種、笹岡 (1921 a, 1921 b, 1925 b) で新種や新産地として記録されているものの中にも含まれる越中産藓類 23 種、笹岡 (1929 b) の中の越中産藓類 13 種を含み、さらにその後の研究によって発見したものも追加されている。この目録は変種や品種を含めて 39 科 285 種におよび、近畿地方の目録と同様に特記すべき記録である。

「近畿地方藓類目録」(笹岡 1934 c, 1934 d, 1934 e) では新種及び其の他は特に採集者名が記されているが、いずれが新種であるのか其の他は何を指すのかわからない。同様に「富山県産の藓類」(笹岡 1938 a, 1938 b, 1938 c) の目録で○印が付いたものは新種・珍種とされているが、いずれが新種でいずれが珍種であるかの分別もつかないことは、大変残念である。

笹岡によって記録された一連の近畿地方、富山県に産する藓類の学名を Iwatsuki (1991) と照らし合わせると、記載がなく不明なものや無効名、日本に産するかどうか疑わしいものが含まれている。これらについては今後さらに検討を加え、将来別途報告する事としたい。

「富山県産の藓類」の論文に対しては、異例の原稿料つき掲載決定であったと聞いている。富山県産藓類に関する貴重な原稿であったこととともに、笹岡が経済的に恵まれていなかったことへの配慮があったものと考えられる。

おわりに

笹岡の没年については定かでない。富山県の植物相研究に詳しい進野久五郎によれば、東京での空襲が激しくなった頃までは音信が続いていたということである。小林 (1984) は戦中・戦後満州にいたため、その間

は直接笹岡との交流がなかったとしながら、「標本のすべてを手離した後に郷里の富山に帰り、僧籍にあった関係から、その方面で糊口を凌いでいたと思われたが、間もなく他界されたことを風のたよりに聞いた」としている。しかしながら、笹岡が戦後富山へ帰ったことを実証する資料は全く無く、各方面からの情報を総合し、昭和20年(1945年)の東京大空襲以後の消息が全く途絶えている点を考えると、その頃に他界されたと考えるのが最も妥当ではなかろうか。

「現在蘚苔類の研究に関しては我国は世界の一大拠点となっている。多くの俊秀がそれぞれ立派な地位にあって、すぐれた業績を次々と挙げている。それにつけても僅々30年以前の笹岡さんの身辺はまことに悲惨なものであった。研究史上の開拓者の一人が斯様な経歴をたどったことを忘れないでほしい」とした小林(1984)の言葉を繰り返して、筆を擱きたい。

この小稿は、富山県中央植物園園長黒川 道博士からのご指摘と勧めに応じて作成したもので、草稿時より貴重な助言をいただき、ご指導を賜った。また、奈良教育大学名誉教授北川尚史博士、国立科学博物館植物研究部の樋口正信博士、月岡郷土史編集の中村太一路委員長ほか関係諸氏からご教示を賜った。ここに記して深く感謝申し上げる。

引用文献

- 安藤久次. 1977. Prof. V. F. Brotherus へ送られた日本植物学者の手紙, 5. 日本蘚苔類学会会報 **2**: 19-21.
- 樋口正信. 1999. 資料紹介 52 笹岡久彦蘚類コレクション. 国立科学博物館ニュース (363): 19.
- 本多啓七. 1996. 富山県産水生地衣類・苔類・蘚類の植物相. 富山の生物 (35): 31-35.
- 井上 浩. 1972 a. 日本の蘚苔類研究史 (I). 自然科学と博物館 **39**: 158-170.
- 井上 浩. 1972 b. 日本の蘚苔類研究史 (II). 自然科学と博物館 **39**: 193-207.
- Iwatsuki, Z. 1991. Catalog of the mosses of Japan. 182 pp. Hattori Botanical Laboratory, Miyazaki.
- 環境庁自然保護局野生生物課(編). 2000. 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータブック 9 植物II 維管束植物以外. 429 pp. 自然環境研究センター, 東京.
- 小林義雄. 1984. 統分裂子. 208 pp. 自費出版.
- 野口 彰. 1934. 日本蘚類学略史. 博物学会誌 (2): 13-17.
- 野口 彰. 1972. 飯柴永吉・笹岡久彦両氏の思い出. 日本蘚苔類学会会報 **1**: 21-25.
- 坂井奈緒子. 2000. 富山県における水生蘚苔類の生態的知見. 富山市科学文化センター研究報告 (23): 153-164.
- 笹岡久彦. 1910. 越中国産蘚類報告 第一. 植物学雑誌 **24**: (197)-(198).
- 笹岡久彦. 1913. 伊勢国産蘚類報告. 植物学雑誌 **27**: (475)-(476).
- 笹岡久彦. 1914. 越中国産蘚類報告 (其二). 植物学雑誌 **28**: (191).
- 笹岡久彦. 1915. 伊勢国産蘚類報告 (其二). 植物学雑誌 **29**: (302)-(303).
- 笹岡久彦. 1916. 越中国産蘚類報告 (其三). 植物学雑誌 **30**: (82)-(83).
- 笹岡久彦. 1919. 蘚類雑記 (一). 植物研究雑誌 **2**: (54)-(55).
- 笹岡久彦. 1921 a. 最近発表若クハ所命ノ新蘚類. 植物学雑誌 **35**: (68)-(69).
- 笹岡久彦. 1921 b. 蘚類植物雑記 (一). 植物学雑誌 **35**: (272)-(273).
- 笹岡久彦. 1924. 蘚類植物雑記 (二). 植物学雑誌 **38**: (273)-(274).
- 笹岡久彦. 1925 a. 蘚類植物雑記 (三). 植物学雑誌 **39**: (155)-(157).
- 笹岡久彦. 1925 b. 蘚類植物雑記 (四). 植物学雑誌 **39**: (219)-(221).
- 笹岡久彦. 1928 a. 蘚類雑記 (二). 植物研究雑誌 **5**: (242)-(245).
- 笹岡久彦. 1928 b. 蘚類雑記 (三). 植物研究雑誌 **5**: (336)-(337).
- 笹岡久彦. 1929 a. 蘚類雑記 (四). 植物研究雑誌 **6**: (19)-(21).
- 笹岡久彦. 1929 b. 蘚類雑記 (五). 植物研究雑誌 **6**: (75)-(79).
- 笹岡久彦. 1931. 蘚類雑記 (六). 植物研究雑誌 **7**: (92)-(95).
- 笹岡久彦. 1933 a. 蘚類雑記 (七). 植物研究雑誌 **8**: (481)-(484).
- 笹岡久彦. 1933 b. 日本産蘚類ノ原記載文集 (其一). 植物研究雑誌 **9**: 445-449.
- 笹岡久彦. 1934 a. 日本産蘚類ノ原記載文集 (其二). 植物研究雑誌 **10**: 171-174.
- 笹岡久彦. 1934 b. 日本産蘚類ノ原記載文集 (其三). 植物研究雑誌 **10**: 528-531.

- 笹岡久彦. 1934 c. 近畿地方蘚類目録 1. 植物趣味 3 : 167-172
- 笹岡久彦. 1934 d. 近畿地方蘚類目録 2. 植物趣味 3 : 203-206
- 笹岡久彦. 1934 e. 近畿地方産蘚類目録 3. 植物趣味 3 : 242-245
- 笹岡久彦. 1938 a. 富山県産の蘚類. 富山教育 (292) : 64-79.
- 笹岡久彦. 1938 b. 富山県産の蘚類其の二. 富山教育 (295) : 64-77.
- 笹岡久彦. 1938 c. 富山県産の蘚類其の三. 富山教育 (297) : 62-78.
- Stafleu, F. A. (ed.) 1986. Index Herbariorum part. II (6) collectors S. Regnum Vegetabile 114 : 805-985.
- 月岡郷土史編集委員会. 1991. 月岡郷土史. 591 pp. 富山市月岡校下自治振興会, 富山.
- 山岡正尾. 1941. 立山山麓光蘚 (ひかりごけ) 発生地. 富山県師範学校校友会会誌 (33) : 9-21.
- 山岡正尾. 1994. 富山県内のホンモンジゴケ生育地 1. 富山の生物 (33) : 28-29.
- 吉沢庄作. 1925. 立山. 194 pp. 北陸出版社, 富山.
- (¹〒939-3551 富山県富山市水橋中村 416 ; ²〒939-8084 富山県富山市西中野町 1-8-31 富山市科学文化センター 416 Mizuhashinakamura, Toyama 939-3551, Japan ; ²Toyama Science Museum, 1-8-31 Nishinakano-machi, Toyama 939-8084, Japan)